

# 竹本座の旗揚

## 淨瑠璃革命の烽火上る

貞享二年二月（異説元年二月）

いよ／＼新派淨瑠璃義太夫節樹立の日が来た。舊風打破、革命一發の烽火は、泰平の夢まどかなる古淨瑠璃や、手品からくり、歌舞伎小屋の立ちならぶ、道頓堀のまつ唯中から物凄い響きを立てた。

思へば星霜十年ならずして、天王寺村の小百姓が、華々しくも藝壇へ乗り出して、淨瑠璃革命の烽火を揚げやうとは、彼漸やくに三十五歳。

新派淨瑠璃の發表と同時に、尾崎權右衛門、竹屋庄兵衛との同盟はいよ／＼鞏固にかためられ義兄弟といふことになった。理太夫も、もう理太夫ではいけない、竹本義太夫と改めた。竹本は盟主竹屋の一字を取つたもの、義太夫は義を重んずるといふ信念から、かうなると三味線の尾崎權右衛門も、竹屋の竹と淨瑠璃三味線の始祖澤住檢校の一字を取つて、竹澤名はそのまゝの權右衛門、これが現今に至るまで、義太夫三味線の開祖として尊崇の的となつてゐる人である。由來三味線の名稱に、豊澤、野澤、花澤、鶴澤などこゝに因を發してゐるわけである。

權右衛門は泉州尾崎の産れ、温厚篤實の人、義太夫と結んで三十餘年、終始彼れを助け、義太夫歿後は、斷然舞臺を退いて餘生を門弟の教養に努めたと云つた義理堅い人である。

竹屋庄兵衛又興行界の傑物、始め宇治加賀の一座に資を下ろしてゐたが、義太夫將來の機を見込んで、遂に彼れを大成せしめた。かうした、三偉人の同盟によつて、新派義太夫節なる大旗は、道頓堀西の芝居（現今浪花座の在る處）に勇ましく翻へつた。

先づ劇場の表屋根に上げた櫓には、義太夫自家の定紋、鞠ばさみに九枚笹を描いた幔幕をめぐるし、櫓の下には長方形の大看板に、『太夫、竹本義太夫』の七字を墨痕あざやかに大書して座長の責任を明らかにし、こゝに即ち『櫓下』なる名稱の嚴肅なる意義を確立したのであつた。（もつとも此櫓下の法式は元和の頃、薩摩淨雲がまだ江戸へ下らず次郎右衛門と號して浪花の地にあつた時、始めて

出來た一の形式ではあるが、義太夫に依つて眞の意義が確立したわけである。次郎右衛門時代櫓下の起源は後に文樂座時代の項に詳しく云ふ)

さて義太夫節の旗印を掲げて、第一彈を放つた、晴れの興行には如何なる狂言を選定せられたか、近松門左衛門作『世繼會我』がそれである。義太夫會て加賀掾座にある時、近松とも親しくして、將來を期してゐたから、かういふ狂言が手に入つたものであらう。『世繼會我』はもと宇治座の爲めに書いたもので、作者もまた得意の作であり、且つは會我兄弟歿後、虎御前の腹に産れた祐成の一子をして、會我家再興となる筋だから、今度の旗上げの吉例を祝ふの意味を含んでゐること勿論である。

義太夫は、『世繼會我』五段續きに、序、二、三、四、五の大詰に至るまで切場は全部自分で語つてゐる、さうして櫓下なる名稱の責任を如實に果さうとして、定規を立てた。その他の端場は、それ／＼弟子達に受け持たせることにしてゐる。弟子達にも陸奥茂大夫の老巧を筆頭に、美音で鳴らした竹本頼母、學匠で聞えた有隣軒大和掾の父内匠理太夫、其他竹本難波、竹本喜世太夫、など腕揃ひで、三味線には權右衛門の外に、藤四郎、三二(後に鶴澤の元祖友二郎)の名手がゐる。人形には、又後世おやま人形の開山と呼ばれる辰松八郎兵衛が、やうやく腕を磨きつゝあるところであつた。

古きに倦ひて、新しい物に嚮ふ見物心理は今も昔もかわらないで、大衆は自分等の前に興へられたこの珍らしい新淨瑠璃の出現に雀躍して、翕然として集まり、開場の蓋をあけるや否や、潮の如く殺到して、市中の人氣は素晴らしいものだつた。

その頃市中を歩く下女や小者、まだ操りを見たことのない連中、はては橋の袂の乞食までが、かう一口淨瑠璃に唸つて歩いた。

げに享けたき人の體をうけながら例少なき川竹の、流れの身をそ定かならぬ……………

さりさては戀は曲者みな人の、迷ひの淵やきのごくの、山より落つる流れの身……………

『世繼會我』第二段化粧阪の冒頭の文、また第三段虎少將道行のくだりが、こんな風に次第々に擴まつて行つた。先づ義太夫座出發の第一歩は、かうして興行的には幸先よく、進んでゐるのであるが、新淨瑠璃を標榜して、自己の新しい藝術境を拓かうとした義太夫の志とは、相反する方へ見物側の賞讃は趨つて行つたのである。古淨瑠璃の特色である景事、節事の一節がかうして一般的に喜ばれることは決して義太夫の喜びとするところではない。義太夫はさらにさらに精進一番せねばならなかつた。その四月には續いて宇治の古淨瑠璃で近松の推定作である『藍染川』を上演したが、その道行の文句。

墨と硯の戀中を、誰が水さして淺みどり

と、梅の名寄せの曲節が、又もや市中の人達に流布された。

なほ七月にも續いて宇治の古淨瑠璃『いろは物語』を出し、『一心五戒魂』をも上演した。かういふ風にだん／＼興行は續けてゐるが、義太夫の本領は後年、自身の爲めに始めて近松が作をした『出世景清』や、さらに新らしい試みとして社會戯曲『曾根崎心中』が書かれるに及んで、始めて多年の苦心と共に世の中へ現はれ出したのであるから、先づ義太夫座としては試練時代とも云へる。

此年五月十九日、井上流の祖、井上播磨掾が死んだ。かくて我古淨瑠璃の二大巨頭の一つは缺けて、残るは京都の宇治加賀掾ばかりとなつた。



宇治加賀掾筆蹟

## 敵は師匠

### 老藝術家の悲哀

#### 涙の義太夫

義太夫旗上げの報は日ならず、京都の宇治加賀掾の耳を驚かした。かつては我が門弟であつてまだ嘴の青い若輩者の理太夫が、僭上至極にも、井上流でも宇治流でもない新派と稱する旗印を上げて、わが古淨瑠璃に對して反旗を翻へす不敵の振舞ひ、而かも己が名の義太夫節と名乗つて、道頓堀のまつたど中に櫓を上げたその増上慢の鼻つ柱があり／＼と加賀掾の目にうつると、驚きよりも、一種名狀の出來ぬ、不快の思ひに胸を悪くした。實際のところ、その頃の加賀掾は、氣は若いが寄る年波には偽られず、自身の技藝の日に日に衰へて行くさまを自分自身あり／＼と知つてゐたので、心は焦燥つてゐるものゝ、それはどうすることも出來ぬ自然の理であつたけれども氣の短かくなつてゐる加賀掾は、義太夫が人を憚らぬ今度の振舞ひを、どうしてもそのまゝに見過ごして置くわけに行かなかつた。で彼れは深く心に決して、老いたりとは雖も宇治加賀掾何條彼れしきの青二才に後れを取る可きやといふ意氣込みで、遙々大阪出征を試み、道頓堀に櫓を並べて、いで一擡ぎに討ち平らげんと、こゝに二座對立の壯觀を呈することゝなつたのである。